

田代よいとこーその29ー三増合戦 その1ー

中世の田代・半原・三増地区を舞台に戦われた三増合戦（みませかっせん）について、シリーズでご紹介しましょう。

三増合戦は、戦国時代最大の山岳戦といわれています。

＜三増合戦に至る経緯＞

永禄12年（1569）10月、当時の代表的な戦国大名・北条氏（相模国）と武田氏（甲斐国）の軍勢が激突しました。時間の流れを追って見てみましょう。

永禄11年、武田信玄は駿河（静岡県東部）へ兵を送り、今川氏真（うじさね）を攻め、駿府（静岡市）から掛川の方へ追い落としました。これを見た小田原の北条氏康（うじやす）は娘婿の今川氏真を助けるため、4万の大軍をもって出陣し、にらみあいとなりましたが、信玄は結果的に甲府へ引き上げました。

翌永禄12年、信玄は1万8千の兵で伊豆の三島や韮山へ攻め込み、さんざんに打ち壊しました。これに対し、北条軍は3万の大軍を出し防備を固めました。北条氏の動きを知った信玄は、好機到来とばかり小田原攻めの計画を実行しました。

まず、同年8月下旬、群馬県西部から埼玉へと南下、北条方の城を攻めました。別働隊は江戸周辺の諸処を攻めました。北条方は伊豆や駿河の防備に兵をさいていたため、武田軍はたいした抵抗も受けずに小田原へ。そして10月1日に小田原城へ攻め込みました。北条方は、駿河・伊豆方面に部隊を送っているため、城中に兵が少なく、籠城戦をとることになりました。そのため武田軍は城下で乱暴を繰り返しました。

信玄は、やがて10月4日、「鎌倉八幡宮へ参詣する」と偽りの情報を流しながら小田原を出立、平塚で進路を北にとりました。北条氏康はこれを知ると、武田軍は必ず三増峠を越えると判断、2万の軍勢を三増へ派遣しました。武田軍は厚木から反田あたりで中津川を渡り、金田から依知原へ、さらに三増へと進みました。北条軍は武田より先に三増に着いていましたが、いったん半原台地に退き、態勢を整えました。そして、10月6日明け方、志田、道城（どうじょう）、町屋の原に出陣、三増合戦の火ぶたが切って落とされたのでした。



三増合戦場跡遠望（経ヶ岳中腹の林道より撮影。手前は田代地区の住宅街）
『三増合戦』（愛川町教育委員会 平成28年3月）より転載

<三増合戦>

はじめ、武田方の一部が山を登るのを退却と見間違えた北条方は、一気に武田軍を攻め立てました。当初、戦闘は北条方有利で進みました。このとき武田方の侍大将・浅利信種（あさりのぶたね）が戦死しました。志田原に向かった北条氏照らの一隊は武田方の陣地を攻撃、追い詰めました。しかし、その後、武田方の山形昌景（やまがたまさかげ）ら5千の精兵と信玄の旗本が戦闘に加わったことで、北条軍は総崩れとなりました。北条軍は中津川を越え、半原山（経ヶ岳や高取山の総称か？細野城か？定説はないようです）へ逃げました。氏康の嫡男・氏政以下の1万の本隊は荻野新宿まで来ていましたが、時すでに遅く、北条軍配送の報を聞いて小田原に引き返しました。信玄は深追いをせず、武田軍は旧津久井郡の櫛川から旧相模原の反畑（そりはた）に出て、ここで戦勝の式を行い、戦死者の供養をしました。『甲陽軍鑑』（武田氏の軍学書）によると戦死者は北条方3269人、武田方900人とあります。4000人を越える死者を出した激戦だったことがわかります。信玄は反畑での供養の翌日甲府に帰陣しました。<次号に続く>

参考文献 『三増合戦』（愛川町教育委員会 平成28年3月）

『新編相模国風土記稿』（雄山閣 昭和55年）

取材協力 山口研一氏（愛川町郷土資料館）